
散歩

冬桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散歩

【Nコード】

N3470L

【作者名】

冬桜

【あらすじ】

未知？との遭遇です。

暖かい日差しを全身に受けて住宅街を歩く。近所の知り合いに軽い会釈を返し、目的地へと向かった。昨日は雨が降っていたので、多少地面が湿っている。そのため、日の差さない影の部分はアスファルトの色が違う。気温も最近の暖かさとは比べたら涼しい方だと思う。朝早いこともあって歩くには申し分ない。

歩いている途中は特に何も考えなかった。単純に周りの景色を飲み込んでいく。立ち話をする人たち、止まっている赤い車、自転車が傍を通り過ぎ、この時分には買う人もいないだろう。自販機が無意味につつまっている。少し寂れた風景に見えたのは、片付けられていない空き缶が転がっていたからかもしれない。

あと少しで目的地に着こうかというところで、目の前に猫が躍り出てきた。のらだらう猫はこちらを見てピタリと動きを止めた。做らうようにこちらにも動きを止める。猫との睨み合い、もとい見つめあい。気にすることなく歩を進めても良かったのだが、なんとなく足を止めてしまった。止めた時点でこちらに主導権はないように思う。動きたいけど向こうは動く素振りを全く見せない。次第にじれったく思えて、そろそろ動こうとしたとき、猫が唐突に動いた。あつという間に駆けていく猫。その背を見ながらぼんやりと考えた。何やってたんだらうって。

猫はどうやらお得意さんのところに餌をもらいにいったみたいだった。この辺でのら猫が生きていくには、重要なライフラインなのだろう。けれど、餌付けしていいのだろうか。のら猫が増えれば、影響するのは餌付けした本人だけじゃなく周囲にも及ぶ。増えれば何かと困ったトラブルとか起きそうな気がするけれど。

目的地について用事を済ませ、帰路につく。先ほど歩いて来た道を引き返す。行きと帰りの道を別にしようとかはしない。短い距離だというのもあるし、見慣れた風景だというのもある。

もう一度、あの猫に遭遇しそうな気がしてたけど、全然そんなことはなかった。順調に家へと歩く。空き缶が散らかった自販機の前まで来た。散らかっている缶の数は3つ。見過ごすつもりがきつちり片付けて帰ってしまった。

日差しは更に強くなり、時刻はそろそろ正午になるうとしていた。

(後書き)

良い事って難しいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3470/>

散歩

2010年12月30日04時14分発行